

『ガーランド -獣人オメガバース- 上』

著：葵居ゆゆ

ill・原作：羽純ハナ

——蹄の音がする。

慌てて木の陰に身を隠すと、ほどなく、すぐそばの道に馬が現れた。そっと窺ったジルは、声を漏らしそうになって口元を覆った。

手入れの行き届いた栗毛の馬に跨っているのは、狼の獣人だった。

豊かな黒い毛並みに、がっしりとして大きな、堂々とした体躯。威圧感のある狼の顔は額から鼻筋にかけてきっぱりとした力強さがみなぎっている。氷を思わせる淡い青色の目は冷静で、知性の高さが窺えた。

一目見るだけで身体の芯が竦むような、圧倒的な存在感だった。

(……たぶん、アルファだ)

ジルが知っている獣人アルファといえば、幼馴染みのアルバートだけだ。アルバートも恵まれた肉体を持ち、背が高くていかにも頼り甲斐のある外見だが、目の前にいる狼の彼はまとっている空気が違う。周囲にかしずかれてきた者だけが持つ、鷹揚だが有無を言わせない、支配者の気配がした。

ジルは鳥肌の立った腕をぎゅっと身体に巻きつけた。獣人の嗅覚は優れているというけれど、気づかずに通り過ぎてくれるように願う。

だが願いも虚しく、狼の獣人は馬をとめた。

「そのきみ。道を尋ねたいんだが」

「——」

「こちらがミュラー家の屋敷に向かう道で間違いないだろうか？」

支配者然とした見た目に似合わず、穏やかな口調だった。ジルは逡巡したものの、礼儀正しく聞いてきたのを無視するのも悪い気がして、そっと木立から出た。

改めて見ると、彼が裕福な貴族だとわかった。

馬はよく手入れされて艶がよく、獣人特有の古風な服は目立たない刺繍がほどこされた品のいいものだ。馬具も、ハミは精緻な彫刻で彩られ、頭絡にもひかえめながら飾りがついている。ひとつひとつ手間をかけて作られた上等なものばかりだ。

ジルと目があうと男は慣れた仕草で馬を降り、お辞儀までしてくれた。

「急に声をかけてすまない。セントラルから来たもので、このあたりは土地勘がないんだ。途中で会った者に、この道なら村を通らなくても屋敷に行けると聞いたんだが」

およそ貴族らしからぬ振る舞いだった。ジルを見ても丁寧な態度を崩さない。服こそ絹のものでも、鶏を追いかけて回したせいで草や土で汚れているし、髪もぼさぼさなジルは、下働きにしか

見えないはずなのだが。

「——そうです」

用心深くジルはそれだけを答えて、まだ鳥肌の引かない腕を掴んだ。身を守るように胸の前で腕を組み、斜面の下の道にいる狼の獣人を見下ろす。

やはり、どう見てもアルファだ。獣人アルファがたったひとりで急に訪ねてくるなんて聞いたことがない。

もし約束のある来訪なら、いくらみ出し者でもジルにも知らされるはずだった。たとえば、大事な客が来るからおまえはけっして裏から出るな、とか。もしかしたら、彼がアルファではないという可能性もゼロではないけれど。

(でも、アルファとしか思えない……)

こんな特別な雰囲気をもたらす人を、ジルは見たことがなかった。

「……どのようなご用件でしょう。約束があたりですか」

ジルの硬い声音に、獣人はやや困った様子で微笑んだ。

「無礼は承知している。事情があって——というか、衝動にかられて、と言ったほうが正しいか。できることならば早くすませてしまいたくて、ひとりでセントラルから馬を飛ばしてきてしまった」

「衝動にかられて……ですか」

威厳のある狼の獣人は、衝動にまかせて行動するようなタイプには見えない。胡乱な顔をしてしまったのか、ジルの表情を見ると、彼はにっこりと笑った。

「こう見えてせっかちなんだ」

笑うとどこか気安い感じがする。おどけたような身振りもくだけた雰囲気を生んで、ジルは少しだけ警戒をといた。——少なくとも、悪いひとではなさそうだ。

「約束がなければミュラー家の女主人には会えないというなら出直すが、どうだろう？」

「べつに、どうしても駄目ではないと思いますけど——」

ミュラー家は、つきあいのある貴族か、その紹介を受けた貴族にしかオメガを派遣しない。だが、彼はどう見ても格式高そうな貴族だから、ミュラー夫人も追い返したりはしないだろう。

「でも、もしオメガをご所望なら……」

さすがに今日選んで連れて帰るのは無理ですよ、と言おうとしたとき、すぐそばの茂みからヨーヨーが飛び出した。コケーツ、と勇ましく声をあげ、斜面を駆け下りていく。

「あっ、こら！ そっちは駄目だったら！」

ジルは咄嗟に追いかけた。道まで下りて、どうやら半分パニックになっているらしいヨーヨーに飛びついて捕まえる。

「ほら、暴れない！ いい加減おとなしくしろ」

ばたばた暴れる鶏をしっかりと抱きかかえて立ち上がると、獣人が声をたてて笑った。

「なるほど、変わったところにいると思ったら、この鶏を追いかけていたのか。ずいぶん手こずったんだな」

「……手こずったわけじゃないです」

「そうかな？ その鶏はよく脱走するようだ」

「どうして？」

ジルは驚いて振り返った。なぜそんなことがわかるのだろうか？

同じ高さの地面に立つと、狼の獣人は背が高く、かなり見上げなければならない。大きく尖った耳の下の鋭い目を見上げると、その目がふっとやわらいだように見えた。

「エニシダの茂みに逃げ込んだだろう。逃げ慣れているから、そういうところに入るんだ」

数歩歩み寄った獣人がすっと手を伸ばしてくる。ジルは思わずびくりと首を竦めた。

「失礼。これがついていた」

穏やかな声で詫び、彼はつまんだエニシダの花の房を見せてくれた。

はらはらと、小鳥を思わせる黄色の花弁が散っていく。

「きみには誓って触れていない」

なだめるような口調に、ジルはかあっと赤くなった。わざわざ謝って、触れていない、と言うなんて——オメガだと、気づかれているのだ。当たり前だ。首飾りをしているのだから。

(気づいてるなら、どうしてこんな、普通に話してるんだ)

ジルは鶏を抱えたまま後退った。

人間とは違う狼の表情からは、彼がなにを考えているのか、まったくわからなかった。だが、どうやら呆れたり馬鹿にしたりしている様子はなさそうだ。ミュラー家の規則を守るなら、ジルは彼と話すべきではないけれど、物腰も穏やかなこのひとに、無礼な態度を取るのも気が引けた。

逃げたほうがいいのか、それとも、なにか言えばいいのか。

なにしろ、アルバート以外で屋敷の外のひとに会うのが久しぶりすぎる。

迷って立ち尽くすしかないジルに、狼の獣人はのんびりと言った。

「ミュラー家のオメガなら、鶏一羽くらい下働きにでも探させたらいいのに、よほど大事な鶏なのか？」

小首をかしげて鶏を眺められ、ジルは迷いながら口をひらいた。

「べつに……ただの、食用です」

オメガだけれど罰として使用人と同じ仕事をしているのだと説明するわけにもいかないし、実は鶏と追いかけてこをするのが楽しいだなんて、打ち明けられるはずもない。

愛想のない警戒心剥き出しの返答にも、獣人は腹を立てる様子もなかった。

「ただの食用なのに、草だらけになるまで追いかけたのか？ 一羽くらいいなくなっても困りはしないだろうに——ああ、でも、たしかにうまそうな鶏だな。太っているがよく運動しているおかげで身は締まっていそうだし、脂も乗っていそうだ。こいつがしょっちゅう脱走するのは、食べられたくないからかな」

優しげな表情で、獣人は鶏を見つめる。

「いっそ、今ここで絞めてやったほうがいいんじゃないか？」

ジルは半分呆れて獣人を見上げた。

(ほんとに変なひと)

優しいのか、無情なのか。オメガとわかっていて横柄に振る舞うわけでもなく、のんびり雑談なんかして——礼儀正しいのか、そうじゃないのかもよくわからない。それに、初対面の相手に、今ここで絞め殺せだなんて。

「食べられたくなくて逃げてるかもしれないのに、早く殺せって言うんですか？　かわいそうだとか、逃がしてやればいい、とかじゃなくて」

「なぜだ？」

獣人は不思議そうだった。

「食用の鶏だろう。逃がしたとしても、ずっと飼われていてこんなに丸々と太っているし、飛べないように羽を切られている。いくら脱走の常習犯でも、庭の外に出れば、すぐに獣に襲われて終わりだ。それに、食べられる運命が変えようがないなら、恐怖が長引くほうがかわいそうだろう？　だったら、ここで絞めて殺したほうが苦しまずにすむ」

「苦しまずに……」

冷静で、その分酷薄にも聞こえる言葉だった。

けれど、たぶん彼が正しい。正しくて、もしかしたらジルよりもずっと、慈悲深くさえあるのかもしれない。

わかっていて、ジルはすっかりおとなしくなった鶏を抱きしめ直した。

「でも、もしかしたら、逃げたら生き延びられるかもしれないじゃないですか」

脳裏に浮かぶのは幼いころ、窓にぶつかって死んでしまったあの小鳥だ。

空を目指し、見えない硝子にはばまれた小鳥は、ジルの手の中で苦しそうだった。窓が開いていたなら、あの苦しみを小鳥は味わわずに、自由を謳歌できたかもしれない。

運よくタカに襲われずに、生き延びることができる可能性だって——絶対に、あったはずなのだ。

それが、奇跡的なほどわずかな確率だったとしても、あったはずだと、今でも信じたい。

ヨーヨーが逃げるとわかっていて庭に放すのをやめないのも、どこかで信じたい気持ちがあるからなのだと、ジルは気づいて唇を噛んだ。

追いかけて草や泥にまみれるのが楽しいだけじゃなくて——どこかで、逃げ出してくれないか、と思うから。

逃げて、外の世界で生き延びて、万にひとつでも今よりも幸福な自由を手に入れられるのだと、見せてほしくて。

（私は——まだ、逃げたいんだ）

諦め、納得したつもりだった。オメガは籠の鳥で、この籠から出ても別の籠に移るだけで、そういう存在だと、わりきったつもりでいた。

けれど、完全に受け入れられたわけではないのだと思い知る。

「だが、獣に襲われて後悔しても遅いだろう」

ごく生真面目に、獣人は答えた。

「ひとの手なら一番的確に殺せる」

言っていることは冷たくも聞こえるが、声は穏やかだ。鶏を見る目はいつそ優しげにさえ見え

て、ふっと声がこぼれた。

「ではあなたなら、私のこともここで殺してくれますか？」

言ってしまうってから、ジルははっと我に返った。

獣人も、あまりに唐突な言葉に呆気に取られている。見ひらかれた彼の瞳に恥ずかしくなつて、ジルは顔を伏せた。

「すみません、おかしいことを言って……すぐに家の者を呼んでまいります。この道を行けば、すぐに正面玄関のほうに出られますから、どうぞそちらからお越してください」

「きみは、この家のご子息かな？ 私はディエゴ」

踵を返そうとしたジルに、礼儀正しく獣人が声をかけた。

「ディエゴ・ジークフリードと申す者です」

「ジークフリード……！」

驚いて、ジルはまともに彼を見上げてしまった。

バーネルード国で一番力のある貴族、ジークフリード家の獣人が訪れるなんて、由緒あるミュラー家でも初めてのできごとだ。

知らない人間はいないくらいの、特別な貴族——つまりこの男は、国の中でもっとも権力を持つ獣人アルファのひとりなのだ。

「きみは羽を切られた食用の鶏ではあるまい。鳥だとしても、もっと美しく、誰からも求められる優美な生きものだ」

「……いいえ」

握手の手を差し出され、ジルは後退った。

弱音のように「殺してくれますか」などと口走ったジルを、慰めてくれているのだろうディエゴの言葉が寂しかった。大勢から求められたところで、自由じゃないなら同じだ。

「私は、鶏と大差ありません。うたえと言われたらうたうしかない」

つぶやき、ジルはお辞儀した。

「私は落ちこぼれなので、あなたのような立派な方のお相手をする資格はありません。すぐに家の者に案内させますので、どうぞ正面玄関でお待ちください」

ぎゅっとヨーヨーを抱えて、ジルは斜面を駆け上がった。

道が見えなくなっても足をゆるめず、木立の中を進み、裏の畑との境の工ニシダの茂みの前まできて、ようやく立ちどまる。

今を盛りにたっぷりと咲いた黄色い工ニシダの花が、眩しい日差しに輝いている。自分の髪から取り去られた花房と、長い指を思い出して、複雑に胸が騒いだ。

「——ご子息、だって。オメガ相手にあんなこと、言うひとがいるんだ……」

耳にはディエゴの深く穏やかな声が残っている。抱きしめたままのヨーヨーの温もりが、いつになく胸に染みた。

オメガに対して握手を求める貴族なんて変わり者だ。汚れて、どう見ても怪しいだろうに、丁寧な態度を崩さなかった。きっと温厚で誠実なひとなのだろう。

でも、そんな彼さえ、外で生きていけないものならば、苦しめないよう殺したほうがいい、と

言うのだ。

ならばジルも死ぬしかない。

小さな籠に閉じ込められたまま、オメガという部分だけを愛でられて——飛びたいと願うジルの本当の心は、ゆっくり絞め殺されてゆくだけだ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>